

第2部 ロボット機構学 (Robot Kinematics)

宇都宮大学工学研究科 吉田勝俊

2015.10.1 版

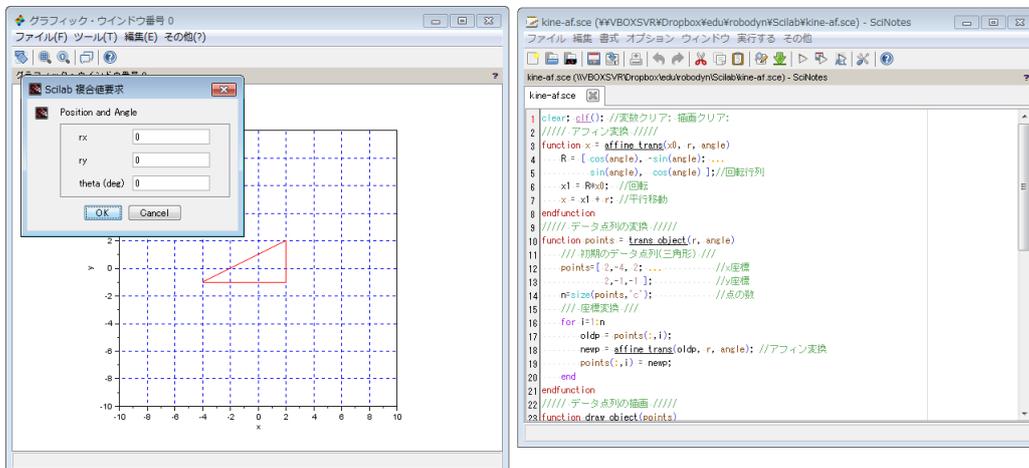
目次

| | | |
|-----|----------------|----|
| 5 | 位置ベクトルと座標系 | 2 |
| 5.1 | ベクトルとその成分 | 2 |
| 5.2 | 基底の回転 | 3 |
| 5.3 | 3次元の回転行列 | 4 |
| 6 | 多体系の運動学 | 6 |
| 6.1 | 座標系と空間座標 | 6 |
| 6.2 | 部品図と組立図 | 6 |
| 6.3 | 部品図から組立図への座標変換 | 8 |
| 7 | ロボット運動学 | 9 |
| 7.1 | アフィン変換の行列表示 | 9 |
| 7.2 | ロボット・マニピュレータ | 10 |
| A | プログラム例 | 14 |

▶▶ (Scilab について) これ以降に提示するプログラム例は、Scilab というフリーの数値解析ソフトで書かれている。Scilab は市販の Matlab とほぼ同等の機能を持ち、Windows, Linux, Mac OS で安定に動作する。使い方の概要を「Scilab 超入門 - 吉田の教材文庫」

<http://edu.katzlab.jp/lec/scilab>

にまとめておいた。空き時間に自習しておくこと。自習を前提にレポートを課す。



5 位置ベクトルと座標系

5.1 ベクトルとその成分

平面上の幾何ベクトル x (矢印) を考える．矢印は，算数を知らない幼児にも描ける図形であり，成分(数値)とは無関係に存在する．

こうした図形を数値化するため，図1のように，幾何ベクトル x の縦横の寸法 x_1, x_2 を測る．得られた寸法からなる数ベクトル $\tilde{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 2 \\ 1 \end{bmatrix}$ を， x の直交成分 (orthogonal component) という．しかし，寸法の測り方は縦横だけではない．図2のように斜めに測

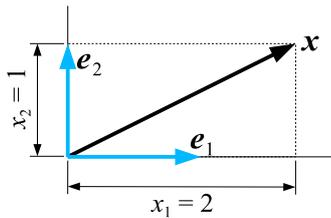


図 1: x の直交成分

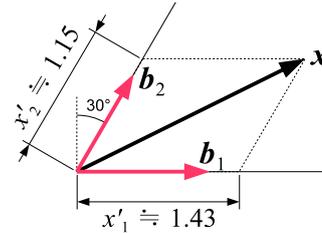


図 2: 同じ x の斜交成分 (図の寸法は実測値で誤差を含む)

ると，同じベクトル x でも寸法の値は変化する．このような， x を対角線とする平行四辺形の 2 辺の寸法 $\tilde{x}' = \begin{bmatrix} x'_1 \\ x'_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1.43 \\ 1.15 \end{bmatrix}$ を， x の斜交成分 (oblique component) という．

このように，幾何ベクトル x の成分とは寸法のことであり，寸法の測り方しだいで成分は変化する．

以上を代数化する．直方体の 2 辺の方向を，単位ベクトル¹⁾ e_1, e_2 で表すと，図1の測量操作は，次のように数式表現できる．

$$\text{ベクトル } x \xrightarrow{\text{展開}} x = x_1 e_1 + x_2 e_2 \xrightarrow[\text{係数}]{\text{展開}} \text{成分} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} \equiv \tilde{x} \quad (5.1)$$

同様に，図2については，

$$\text{ベクトル } x \xrightarrow{\text{展開}} x = x'_1 b_1 + x'_2 b_2 \xrightarrow[\text{係数}]{\text{展開}} \text{成分} \begin{bmatrix} x'_1 \\ x'_2 \end{bmatrix} \equiv \tilde{x}' \quad (5.2)$$

である．空間の 3 次元ベクトルについても同様に成分が定義できる．

算法 2.1 (ベクトルの成分表示) 成分測定用のベクトルの組 $\mathcal{E} = \langle e_1, e_2, e_3 \rangle$ を，基底 (basis) という．ベクトル x を基底 \mathcal{E} で展開する．

$$x = x_1 e_1 + x_2 e_2 + x_3 e_3 \xrightarrow[\text{係数}]{\text{展開}} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} \equiv \tilde{x} \quad (5.3)$$

このときの展開係数 \tilde{x} を，ベクトル x の成分 (component) という．本書では， \mathcal{E} で測った x の成分を， $[x]_{\mathcal{E}}$ または $\tilde{x}_{\mathcal{E}}$ と書く．

¹⁾長さが 1 のベクトル．

実習 2.1

1. 基底 $\mathcal{E} = \langle i, j, k \rangle$ で測った , ベクトル $v = 1i + 3j + 2k$ の成分 $\tilde{v}_{\mathcal{E}}$ を求めよ .
2. 基底 $\mathcal{E} = \langle i, j, k \rangle$ で測った , ベクトル $w = 3j + 2k$ の成分 $\tilde{w}_{\mathcal{E}}$ を求めよ .
3. 基底 $\mathcal{B} = \langle i + j, i - j, k \rangle$ で測った , ベクトル $w = 3j + 2k$ の成分 $\tilde{w}_{\mathcal{B}}$ を求めよ .

5.2 基底の回転

平面上に正規直交基底 $\mathcal{E} = \langle i, j \rangle$ をとる²⁾ . これを右ねじ方向 (i を j に回す向き) に角度 θ だけ回したものを

$$R_{\theta}(\mathcal{E}) := \langle R_{\theta}(i), R_{\theta}(j) \rangle \quad (5.4)$$

と書く . このとき , 作図より ,

$$R_{\theta}(i) = \cos \theta i + \sin \theta j, \quad R_{\theta}(j) = -\sin \theta i + \cos \theta j \quad (5.5)$$

となる .

実習 2.2 ノートに図示せよ .

ここで , $R_{\theta}(\mathcal{E})$ で測った x の成分を $\tilde{x}_{R_{\theta}(\mathcal{E})} = (x', y')^T$ とすると ,

$$\begin{aligned} x &= x'R_{\theta}(i) + y'R_{\theta}(j) = x'(\cos \theta i + \sin \theta j) + y'(-\sin \theta i + \cos \theta j) \\ &= (x' \cos \theta - y' \sin \theta)i + (x' \sin \theta + y' \cos \theta)j \end{aligned} \quad (5.6)$$

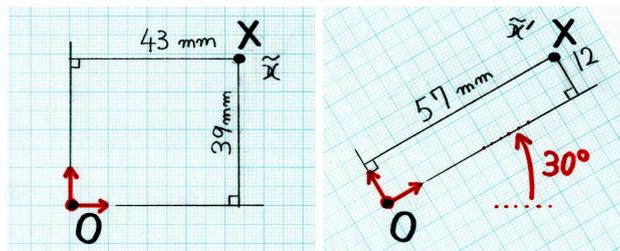
となる . ゆえに , 同じベクトル x を元の基底 $\mathcal{E} = \langle i, j \rangle$ で測った成分 $\tilde{x}_{\mathcal{E}} = (x, y)^T$ は ,

$$\tilde{x}_{\mathcal{E}} = \begin{bmatrix} x \\ y \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x' \cos \theta - y' \sin \theta \\ x' \sin \theta + y' \cos \theta \end{bmatrix} = \underbrace{\begin{bmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix}}_{[R_{\theta}]} \begin{bmatrix} x' \\ y' \end{bmatrix} = [R_{\theta}] \tilde{x}_{R_{\theta}(\mathcal{E})} \quad (5.7)$$

のように表すことができる . 行列 $[R_{\theta}]$ を (2次元の) 回転行列という . 逆変換は逆回転であるから , 次の関係が成立する .

$$[R_{\theta}]^{-1} = [R_{-\theta}] = \begin{bmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix} \quad (5.8)$$

実習 2.3 正規直交基底 $\mathcal{E} = \langle i, j \rangle$ と , これを 30° だけ回した基底 $R_{30^{\circ}}(\mathcal{E}) = \langle R_{30^{\circ}}(i), R_{30^{\circ}}(j) \rangle$ をとる . あるベクトル x について , $\tilde{x}_{R_{30^{\circ}}(\mathcal{E})} = (57, 12)^T$ であるとき , $\tilde{x}_{\mathcal{E}}$ を求めよ .



同様の関係式が 3次元でも成立する .

²⁾ 「正規」とは , 基底ベクトルの長さが $|i| = |j| = 1$ であること .

算法 2.2 (基底の回転) 正規直交基底 $\mathcal{E} = \langle i, j, k \rangle$ と, これを 3 次元回転させた基底 $R(\mathcal{E}) = \langle R(i), R(j), R(k) \rangle$ をとる. 任意の 3 次元ベクトル x について,

$$\tilde{x}_{\mathcal{E}} = [R] \tilde{x}_{R(\mathcal{E})} \quad \text{または} \quad \tilde{x}_{R(\mathcal{E})} = [R]^{-1} \tilde{x}_{\mathcal{E}} \quad (5.9)$$

が成立する. $[R]$ は 3 次元の回転を表す 3×3 の回転行列である (成分は後述する).

5.3 3次元の回転行列

3次元の回転行列は, 9つの成分:

$$[R] := \begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} & R_{13} \\ R_{21} & R_{22} & R_{23} \\ R_{31} & R_{32} & R_{33} \end{bmatrix} \quad (5.10)$$

を持つが, これらは互いに独立ではない. 仮に 9 成分を任意に設定できるなら, ベクトルの長さを変える変換が含まれるが, これはベクトルの長さを保つ回転変換に反する.

5.3.1 回転軸 a まわりの θ 回転

ベクトル x と同じ始点をもつ単位ベクトル a をとる. a を回転軸として, x を右ねじ方向に角度 θ だけ回転させる変換は, 若干手の込んだ作図より,

$$y = R(x) := (a \cdot x)a + \cos \theta \{x - (a \cdot x)a\} + \sin \theta (a \times x) \quad (5.11)$$

と表せる. \cdot は内積, \times はクロス積である. 正規直交基底 $\mathcal{E} = \langle i, j, k \rangle$ に対して,

$$x = x_1 i + x_2 j + x_3 k, \quad a = a_1 i + a_2 j + a_3 k \quad (5.12)$$

と展開したものを (5.11) に代入し, 内積とクロス積の性質,

$$i \cdot j = j \cdot k = k \cdot i = 0, \quad i \cdot i = j \cdot j = k \cdot k = 1,$$

$$i \cdot j = j \times k = k \times i = 0, \quad i \cdot j = k, \quad j \times k = i, \quad k \times i = j, \quad u \times v = -v \times u$$

で整理する. 得られた結果を, $y = y_1 i + y_2 j + y_3 k$ と等値すると,

$$\begin{aligned} \tilde{y}_{\mathcal{E}} &= [R(a_1, a_2, a_3, \theta)] [\tilde{x}]_{\mathcal{E}} : \\ \begin{bmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \end{bmatrix} &= \begin{bmatrix} a_1^2 + (1 - a_1^2)C_\theta & a_1 a_2 (1 - C_\theta) - a_3 S_\theta & a_1 a_3 (1 - C_\theta) + a_2 S_\theta \\ a_1 a_2 (1 - C_\theta) + a_3 S_\theta & a_2^2 + (1 - a_2^2)C_\theta & a_2 a_3 (1 - C_\theta) - a_1 S_\theta \\ a_1 a_3 (1 - C_\theta) - a_2 S_\theta & a_2 a_3 (1 - C_\theta) + a_1 S_\theta & a_3^2 + (1 - a_3^2)C_\theta \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} \end{aligned} \quad (5.13)$$

という成分を得る ($\cos \theta = C_\theta, \sin \theta = S_\theta$). この表現では, 回転行列の 9 成分 $R_{11}, R_{12}, \dots, R_{33}$ は各々 4 つのパラメータ a_1, a_2, a_3, θ で表されるが, 単位ベクトルの制約条件 $a_1^2 + a_2^2 + a_3^2 = 1$ があるので, 代数的には 3 つ a_i, a_j, θ を指定すれば残りが決まる.

特にロボット・マニピュレータの議論では, 回転軸を x 軸: $\tilde{a} = (1, 0, 0)^T$, y 軸: $\tilde{a} = (0, 1, 0)^T$, z 軸: $\tilde{a} = (0, 0, 1)^T$ にとった次の回転行列がよく登場する.

$$[R_x(\theta)] = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & C_\theta & -S_\theta \\ 0 & S_\theta & C_\theta \end{bmatrix}, \quad [R_y(\theta)] = \begin{bmatrix} C_\theta & 0 & S_\theta \\ 0 & 1 & 0 \\ -S_\theta & 0 & C_\theta \end{bmatrix}, \quad [R_z(\theta)] = \begin{bmatrix} C_\theta & -S_\theta & 0 \\ S_\theta & C_\theta & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix} \quad (5.14)$$

5.3.2 オイラー角

(5.14) の行列の掛け合わせで表した回転行列を、オイラー角という。

- Z-Y-Z 型 (狭義のオイラー角) $[Euler(\phi, \theta, \psi)] := [R_z(\phi)][R_y(\theta)][R_z(\psi)]$
- X-Y-Z 型 (ロール・ピッチ・ヨー角) $[RPY(\phi, \theta, \psi)] := [R_x(\phi)][R_y(\theta)][R_z(\psi)]$

いずれの方式も、回転行列の成分 $R_{11}, R_{12}, \dots, R_{33}$ が取りうる全ての値を ϕ, θ, ψ の組み合わせで表せる。用途に応じて、X, Y, Z の他の組み合わせも使用される。

Z-Y-Z 型は、コマの姿勢を表すのに適している。z 軸まわりに ψ だけスピンさせたコマを θ だけ傾け、これを z 軸まわりに ϕ だけ公転させた姿勢を表す。X-Y-Z 型は、車両 (または航空機) の姿勢表現によく使われる。x 軸を進行方向、z を鉛直上向きとして、操舵による回頭 ψ をヨー角、左右への傾き θ をロール角、前後への傾き ϕ をピッチ角という。

このように、オイラー角は 3 つのパラメータ (必要最小限) で回転行列を表せるが、ジンバルロックという不具合を引き起こす欠点がある。

▶▶ (ジンバルロック) ある操作盤に、 ϕ 用のツマミ、 θ 用のツマミ、 ψ 用のツマミがあり、これら进行操作すると、X-Y-Z 型のオイラー角にしたがって物体の姿勢を操作できるとする。ツマミが 1 つ壊れても、残りの 2 方向は操作できるはずだが、そうならない場合がある。例えば、 θ のツマミが $\pi/2$ の位置で壊れたとする。このとき、残りの ψ と ϕ の回転軸が重なるので、 ψ と ϕ をどのように操作しても、1 軸まわりの回転しか起こせない。すなわち、実質的なツマミが 1 つ減る。このような不具合をジンバルロックという。ジンバルロックを引き起こす $\theta = \pi/2$ のような姿勢を特異点という。

5.3.3 オイラーパラメータ (クォータニオン)

人工衛星の姿勢制御だとか、体操選手の「前方かかえ込み 2 回宙返り 1/2 ひねり」など、ものすごいグルグル回る対象を計算したいとき、オイラー角のジンバルロックは致命的である。ジンバルロックを解消するには、(5.13) の回転軸 $\tilde{a} = (a_1, a_2, a_3)$ と回転角 θ に戻ればよい。ただし、そのまま使うことは稀で、面倒な三角関数 \sin, \cos を嫌って、

$$\mathbf{q} = (q_0, q_1, q_2, q_3)^T := \left(\cos \frac{\theta}{2}, a_1 \sin \frac{\theta}{2}, a_2 \sin \frac{\theta}{2}, a_3 \sin \frac{\theta}{2} \right)^T \quad (5.15)$$

という書き直しが行われる。書き直した \mathbf{q} を、オイラーパラメータ (Euler parameters) もしくは単位クォータニオンという。

オイラーパラメータ \mathbf{q} を使うと (5.13) の回転行列は、

$$[R(a_1, a_2, a_3, \theta)] = \begin{bmatrix} 1 - 2q_2^2 - 2q_3^2 & 2q_1q_2 - 2q_0q_3 & 2q_0q_2 + 2q_1q_3 \\ 2q_1q_2 + 2q_0q_3 & 1 - 2q_1^2 - 2q_3^2 & -2q_0q_1 + 2q_2q_3 \\ -2q_0q_2 + 2q_1q_3 & 2q_0q_1 + 2q_2q_3 & 1 - 2q_1^2 - 2q_2^2 \end{bmatrix} =: [R(\mathbf{q})], \quad (5.16)$$

$$\text{ただし、} q_0^2 + q_1^2 + q_2^2 + q_3^2 = 1. \quad (5.17)$$

に書きかわる ($\because \sin^2 \theta + \cos^2 \theta = 1, a_1^2 + a_2^2 + a_3^2 = 1$)。成分から三角関数が消えてスッキリしたが、見た目だけではない。 (a_1, a_2, a_3, θ) において、 $\sin \theta, \cos \theta, a_1^2 + a_2^2 + a_3^2 = 1$ の果たした役割が、1 本の拘束条件 (5.17) に集約されてしまった。というわけで、オイラーパラメータ \mathbf{q} を計算するときは、三角関数のことは忘れて、単なる 2 次式であるところの拘束条件 (5.17) だけ念頭に置けばよい。この新しい表現において、ジンバルロックは起らない。

6 多体系の運動学 (Multibody Kinematics)

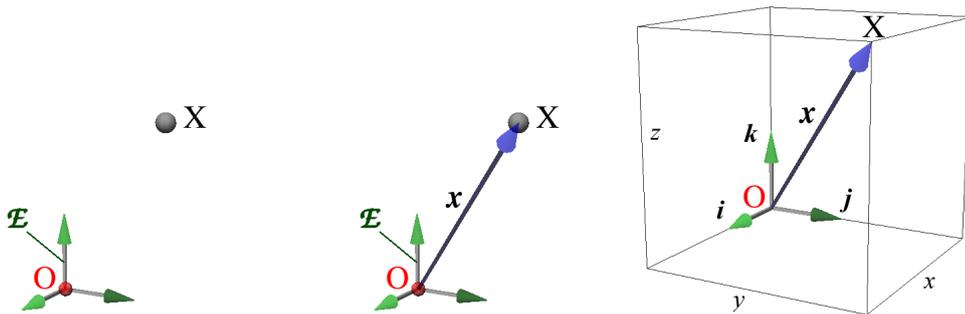
ロボットの各関節が時々刻々と角度を変え、手先がある運動経路を実現する。このような複数の部品からなる構造を、多体系 (multibody system) という。ここでは、このような多体系の姿勢を数式表現する。最後に、仮想マニピュレータをキーボードで操作する。

6.1 座標系と空間座標

点 X の空間座標 $\tilde{X}_{(O,\mathcal{E})}$

1. 測定基準点 O と基底 \mathcal{E} を選ぶ。その組 (O, \mathcal{E}) を座標系という。
2. $O \sim X$ に矢印 x を引く。この x を位置ベクトルという。
3. \mathcal{E} による x の成分 $\tilde{x}_{\mathcal{E}} = (x, y, z)^T$ を (O, \mathcal{E}) で測った X の空間座標という³⁾。

$$\text{本書の表記: } \tilde{X}_{(O,\mathcal{E})} \equiv \tilde{x}_{\mathcal{E}} = \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} \quad (6.1)$$



6.2 部品図と組立図

パソコンの階層的なフォルダのように、多体系の姿勢を部品図と組立図で整理する。

6.2.1 部品図 — 局所座標系

まず、多体系を構成する各部品の形状をデータ化する。

部品形状の表現

1. i 番目の部品用の部品図を用意する。
2. その部品図に直交座標系 $\mathcal{E}_i = (O_i, \mathcal{E}_i)$ を設定する。
部品図に原点 O_i を定め、直交基底 \mathcal{E}_i の方向を決める。
3. 部品の代表点 P_1, \dots, P_k を、 \mathcal{E}_i による座標 ξ_1^i, \dots, ξ_k^i として記録・保持する。
これらの座標データの集合を $\mathcal{X}_i := \{\xi_1^i, \dots, \xi_k^i\}$ で表す。

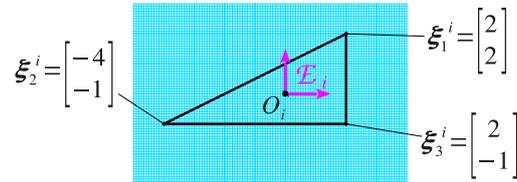
³⁾ $(\dots)^T$ は転置を表す。

部品ごとに設定する直交座標系 \mathcal{E}_i のことを，局所座標系 (local coordinate system; local frame) という．この \mathcal{E}_i で測った部品図上の座標 ξ_1^i, \dots, ξ_k^i を局所座標 (local coordinate) という．一つ気付く点として，

- 部品が剛体であれば，その形状を表す局所座標は，永遠不変の定ベクトルとなる．

ということに注意しよう．

方眼紙に部品図を作成した例を以下に示す．一応， i 番目の部品という想定である．



この部品の代表点を 3 頂点として，図の局所座標系で測ると，形状データは，

$$\mathbf{x}_i = \{\xi_1^i, \xi_2^i, \xi_3^i\} = \left\{ \begin{bmatrix} 2 \\ 2 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} -4 \\ -1 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \end{bmatrix} \right\}$$

となる．3 角形なので 3 頂点としたが，もちろん，別の選び方をしてもよい．

6.2.2 組立図 — 基準座標系

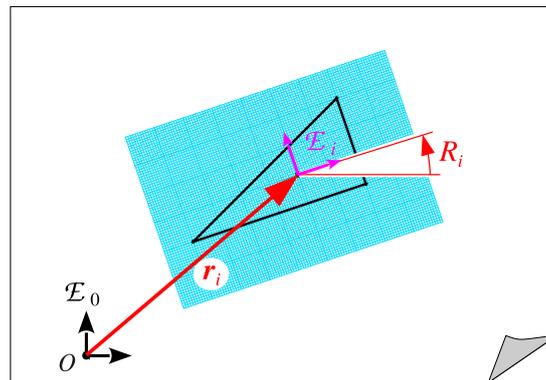


図 3: 組立図上の部品図

部品図が完成したら，図 3 のように，組立図⁴⁾に配置する．トレース紙に書いた部品図を組立図上を滑らせて配置するイメージだ．この状況を次の手順で数式表現する．

部品図の位置と姿勢

1. 組立図用の直交座標系 $\mathcal{E}_0 = (O, \mathcal{E})$ をとる．
2. 部品図 $\mathcal{E}_i = (O_i, \mathcal{E}_i)$ の位置を， \mathcal{E}_0 上の位置ベクトル $\mathbf{r}_i = \overrightarrow{OO_i}$ で表す．
3. 部品図 $\mathcal{E}_i = (O_i, \mathcal{E}_i)$ の姿勢を，回転変換 R_i で表す．
 R_i は，基準基底 \mathcal{E} を， \mathcal{E}_i になるまで回す変換． $\mathcal{E}_i = R_i(\mathcal{E})$ と表記する．
4. 組立図 \mathcal{E}_0 に対する部品図 \mathcal{E}_i の配置を，ペア (\mathbf{r}_i, R_i) で表す．

⁴⁾部品を本来の位置に配置した全体像の図面を「組立図」という．

組立図にとる座標系 \mathcal{E}_0 のことを，基準座標系 (reference coordinate system; reference frame) という． \mathcal{E}_0 で測った座標を，基準座標 (reference coordinate) という．

6.3 部品図から組立図への座標変換

部品図上の局所座標と，組立図上の基準座標は，次の算法で関係づけられる．

算法 2.3 基準座標系 (組立図) に対する局所座標系 (部品図) の配置を (r, R) とする．このとき，局所座標 ξ が指す点は，基準座標，

$$x = R\xi + r \quad (6.2)$$

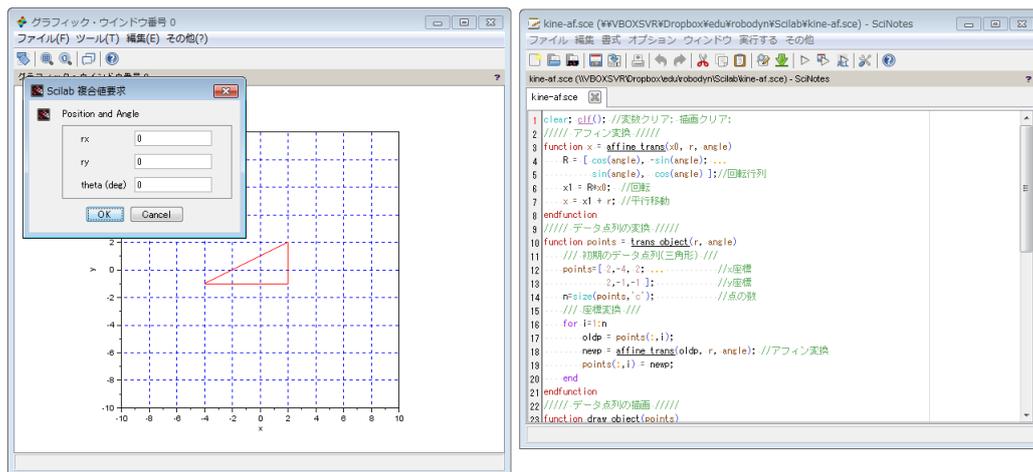
の位置にくる．このような，回してから平行移動する変換のことを，アフィン変換 (affine transformation) という⁵⁾．(証明は図 3 p7 より明らか)

算法 2.3 を使うと，複数の部品間の結合や接触が議論できる．2 つの部品 i, j が，互いに結合/接触するということは，両者が空間の同一点を占めていることに他ならないが，局所座標 ξ_i, ξ_j で比較するのは無意味である．なぜなら，部品図を組立図にどう置くかで，結果が変わってしまう．そこで，組立図に対する部品図の配置 $(r_i, R_i), (r_j, R_j)$ の情報を使って，算法 2.3 により，両者の基準座標，

$$x^i = R_i\xi^i + r_i, \quad x^j = R_j\xi^j + r_j \quad (6.3)$$

をとる．このとき， $x^i = x^j$ は組立図上の同じ点を表す．このような共通の基準座標をもつ 2 つの部品は，結合/接触の状態にあるといえる．

実習 2.4 Code 1 p14 を実行せよ．ダイアログボックスに r の成分と回転角を入力すると，6.2.2 節 p7 の組立図上の三角形が実際に平行移動・回転する．



⁵⁾ 同じ affine を「アファイン」と読む本も多い．

7 ロボット運動学

7.1 アフィン変換の行列表示

アフィン変換 (6.2) p_8 を，成分が見えるように書くと，

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} \\ R_{21} & R_{22} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \xi_1 \\ \xi_2 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} r_1 \\ r_2 \end{bmatrix} \quad 2 \text{次元} \quad (7.1a)$$

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} & R_{13} \\ R_{21} & R_{22} & R_{23} \\ R_{31} & R_{32} & R_{33} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \xi_1 \\ \xi_2 \\ \xi_3 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} r_1 \\ r_2 \\ r_3 \end{bmatrix} \quad 3 \text{次元} \quad (7.1b)$$

のような格好をしている．ここで先人のアイデアだが，以上の変換則は，

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ 1 \end{bmatrix} = \underbrace{\begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} & r_1 \\ R_{21} & R_{22} & r_2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}}_H \begin{bmatrix} \xi_1 \\ \xi_2 \\ 1 \end{bmatrix} \quad 2 \text{次元} \quad (7.2a)$$

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ 1 \end{bmatrix} = \underbrace{\begin{bmatrix} R_{11} & R_{12} & R_{13} & r_1 \\ R_{21} & R_{22} & R_{23} & r_2 \\ R_{31} & R_{32} & R_{33} & r_3 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}}_H \begin{bmatrix} \xi_1 \\ \xi_2 \\ \xi_3 \\ 1 \end{bmatrix} \quad 3 \text{次元} \quad (7.2b)$$

のようにすると，単独の行列 H で表せる．この変換式 (7.2) を同次変換 (homogeneous transformation) といい，行列 H を同次変換行列という⁶⁾．ちなみに，ベクトルの末尾に追加した“1”は，こうした算法上のトリックを実現するためのダミー成分であり，物理的な意味はない．実用上は，注目するベクトル x の末尾に“1”を追加して，同次変換を行い，同次変換が済んだら，末尾の“1”を取り除く．

実習 2.5 行列とベクトルの積を実行し，(7.2a) の上 2 行が (7.1a) に一致すること，(7.2b) の上 3 行が (7.1b) に一致することを示せ．

ロボット工学や 3 次元 CG (Computer Graphics) の分野では，表 1 ~ 表 2 p_{10} のような同次変換行列がよく使われる．

実習 2.6 実習 2.4 のアフィン変換を，同次変換に書き換えよ．これを実行せよ．

▶ 解答例 書き変えたプログラム例を Code 2 p_{14} に示す．動作は実習 2.4 と同じである．

表 1: 同次変換行列 H の例 (2 次元) $C_\theta := \cos \theta$, $S_\theta := \sin \theta$

| 作用 | 表記 | 成分 |
|------|---|--|
| 平行移動 | Trans($[r_i]$) または Trans(r_1, r_2) | $\begin{bmatrix} 1 & 0 & r_1 \\ 0 & 1 & r_2 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ |
| 回転 | Rot(θ) | $\begin{bmatrix} C_\theta & -S_\theta & 0 \\ S_\theta & C_\theta & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ |
| 拡大縮小 | Scal(α, β) | $\begin{bmatrix} \alpha & 0 & 0 \\ 0 & \beta & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ |

⁶⁾または，Denavit-Hartenberg (デナビット・ハーテンベルグ) の変換行列ともいう．詳細は吉川 [1] の 1 章など．

表 2: 同次変換行列 H の例 (3次元) $C_\theta := \cos \theta, S_\theta := \sin \theta$

| 作用 | 表記 | 成分 |
|---------|--|---|
| 平行移動 | Trans($[r_i]$) または Trans(r_1, r_2, r_3) | $\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & r_1 \\ 0 & 1 & 0 & r_2 \\ 0 & 0 & 1 & r_3 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ |
| x 軸回転 | Rot(x, θ) | $\begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & C_\theta & -S_\theta & 0 \\ 0 & S_\theta & C_\theta & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ |
| y 軸回転 | Rot(y, θ) | $\begin{bmatrix} S_\theta & 0 & C_\theta & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ C_\theta & 0 & -S_\theta & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ |
| z 軸回転 | Rot(z, θ) | $\begin{bmatrix} C_\theta & -S_\theta & 0 & 0 \\ S_\theta & C_\theta & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ |
| a 軸回転 | Rot(\mathbf{a}, θ) | $\begin{bmatrix} \text{3次元の回転行列} & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ |
| 拡大縮小 | Scal(α, β, γ) | $\begin{bmatrix} \alpha & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \beta & 0 & 0 \\ 0 & 0 & \gamma & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$ |

7.2 ロボット・マニピュレータ

図 4 の 4 自由度マニピュレータを例にとる．このマニピュレータは，手首が旋回し，肘

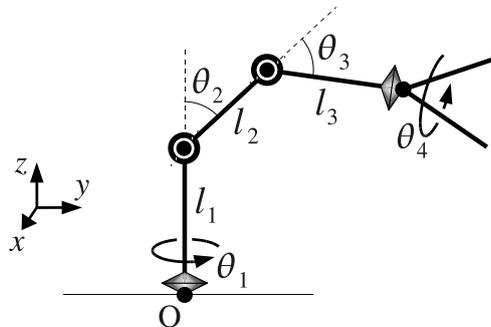


図 4: 4 自由度マニピュレータ

と肩が屈曲し，それ全体が旋回できる．基準座標系 $\mathcal{E}_0 = (O, \mathcal{E})$ の原点 O をマニピュレータの根本にとり，基底 \mathcal{E} は図の向きに取る (x 軸は紙面垂直こちら向き)．

表 1 ~ 表 2 の同次変換を組み合わせて，図 4 のマニピュレータの姿勢を表現してみる．手先からたどっていくのがコツである．

【Step 1】 まず，図 5 左上の局所座標系 \mathcal{E}_1 に，手先の部品図を作成する．図の 3 点を代表点としよう．手首 ξ_1^1 に \mathcal{E}_1 の原点 O_1 をとる．

$$\mathcal{X}_1 = \{\xi_1^1, \xi_2^1, \xi_3^1\} \quad (7.3)$$

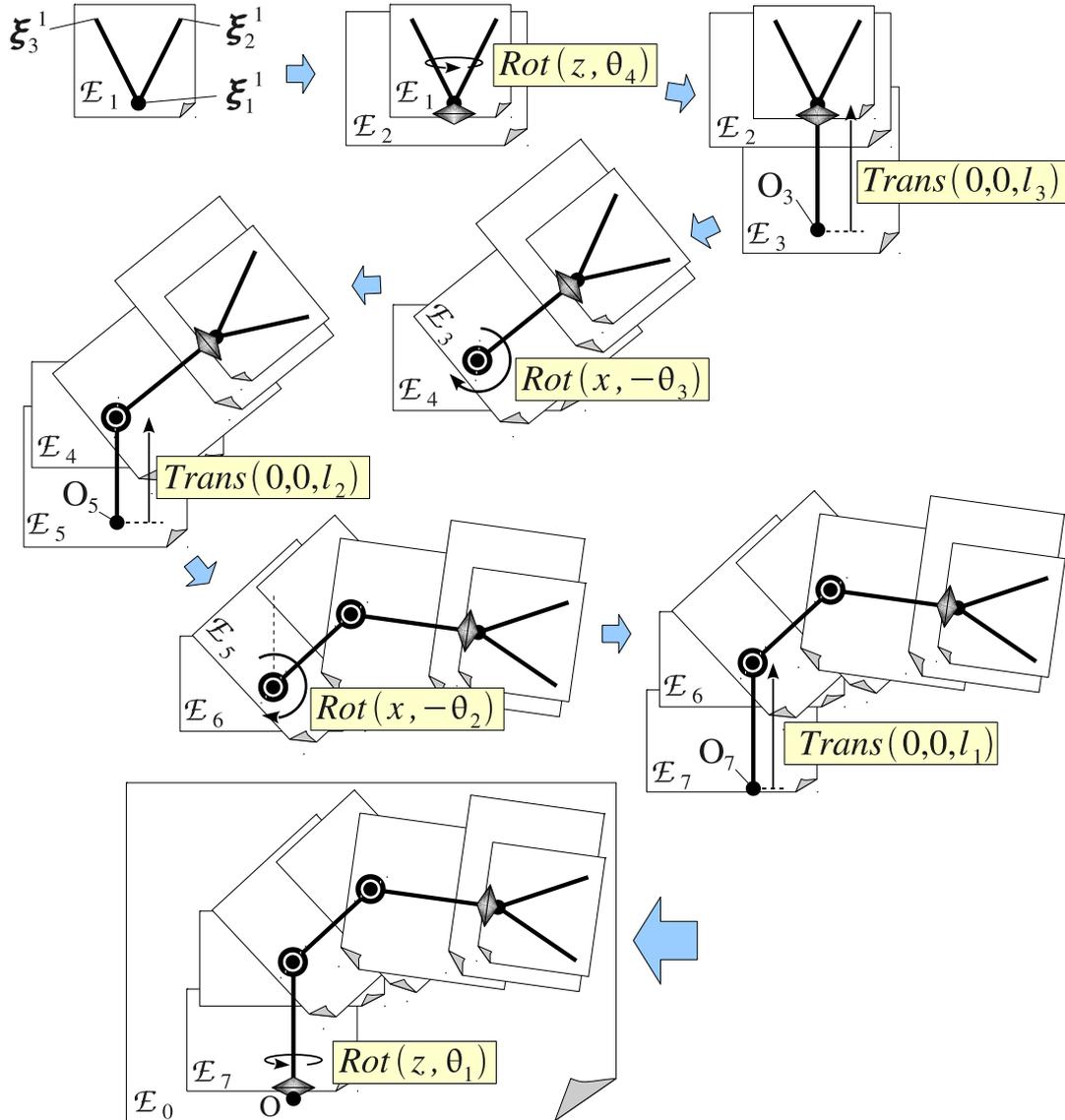


図 5: 4 自由度マニピュレータの運動学

【Step 2】 \mathcal{E}_1 の原点 O_1 (手首) を, 次の局所座標系 \mathcal{E}_2 の原点 O_2 に重ね, \mathcal{X}_1 を \mathcal{E}_2 に対して θ_4 だけ z 軸回転させる. この変換を,

$$\text{Rot}(z, \theta_4)\mathcal{X}_1 := \{\text{Rot}(z, \theta_4)\xi_1^1, \text{Rot}(z, \theta_4)\xi_2^1, \text{Rot}(z, \theta_4)\xi_3^1\}$$

と表記しよう. このとき, \mathcal{E}_2 上の代表点 \mathcal{X}_2 は,

$$\mathcal{X}_2 = R_2\mathcal{X}_1 := \{R_2\xi_1^1, R_2\xi_2^1, R_2\xi_3^1\}, \quad R_2 := \text{Rot}(z, \theta_4) \quad (7.4)$$

となる.

【Step 3】 \mathcal{E}_2 の原点 O_2 を, 次の局所座標系 \mathcal{E}_3 の原点 O_3 に重ね, \mathcal{X}_2 を \mathcal{E}_3 に対してリンク長 l_3 分だけ z 軸方向に平行移動する.

$$T_3\mathcal{X}_2 = T_3R_2\mathcal{X}_1 = \{T_3R_2\xi_1^1, T_3R_2\xi_2^1, T_3R_2\xi_3^1\}, \quad T_3 := \text{Trans}(0, 0, l_3)$$

これに, \mathcal{E}_3 の原点 $O_3 = \mathbb{O}$ を付加した集合,

$$\mathcal{X}_3 = \{T_3 R_2 \xi_1^1, T_3 R_2 \xi_2^1, T_3 R_2 \xi_3^1, \mathbb{O}\} \quad (7.5)$$

が, 部品図 \mathcal{E}_3 上の代表点となる.

【Step 4】 \mathcal{E}_3 の原点 O_3 を, 次の局所座標系 \mathcal{E}_4 の原点 O_4 に重ね, \mathcal{X}_3 を \mathcal{E}_4 に対して肘角度 θ_3 だけ x 軸回転させる.

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_4 = R_4 \mathcal{X}_3 &= \{R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, R_4 \mathbb{O}\} \\ &= \{R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, \mathbb{O}\}, \quad R_4 := \text{Rot}(x, -\theta_3) \end{aligned} \quad (7.6)$$

角度の正は, 紙面手前に進む右ねじの回転方向なので, 図 4 のとり方に合せて $-\theta_3$ とした. 零ベクトル \mathbb{O} を回転しても \mathbb{O} なので, $R_4 \mathbb{O} = \mathbb{O}$ とした.

【Step 5】 \mathcal{E}_4 の原点 O_4 を, 次の局所座標系 \mathcal{E}_5 の原点 O_5 に重ね, \mathcal{X}_4 を \mathcal{E}_5 に対してリンク長 l_2 分だけ z 軸方向に平行移動する. これに, \mathcal{E}_5 の原点 O_5 を付加した集合,

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_5 = T_5 \mathcal{X}_4 \cup \{\mathbb{O}\} &= \{T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, T_5 \mathbb{O}, \mathbb{O}\}, \\ T_5 &:= \text{Trans}(0, 0, l_2) \end{aligned} \quad (7.7)$$

を \mathcal{E}_5 上の代表点とする.

【Step 6】 \mathcal{E}_5 の原点 O_5 を, 次の局所座標系 \mathcal{E}_6 の原点 O_6 に重ね, \mathcal{X}_5 を \mathcal{E}_6 に対して肩角度 θ_2 だけ x 軸回転させた集合,

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_6 = R_6 \mathcal{X}_5 &= \{R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, R_6 T_5 \mathbb{O}, R_6 \mathbb{O}\} \\ &= \{R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, R_6 T_5 \mathbb{O}, \mathbb{O}\}, \\ R_6 &:= \text{Rot}(x, \theta_2) \end{aligned} \quad (7.8)$$

を \mathcal{E}_6 上の代表点とする. 回転の場合は代表点は追加しない.

【Step 7】 \mathcal{E}_6 の原点 O_6 を, 次の局所座標系 \mathcal{E}_7 の原点 O_7 に重ね, \mathcal{E}_6 をリンク長 l_1 分だけ z 軸方向に平行移動し, これに原点 O_7 を付加した集合,

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_7 = T_7 \mathcal{X}_6 \cup \{\mathbb{O}\} &= \{T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, \\ &T_7 R_6 T_5 \mathbb{O}, T_7 \mathbb{O}, \mathbb{O}\}, \quad T_7 := \text{Trans}(0, 0, l_1) \end{aligned} \quad (7.9)$$

を \mathcal{E}_7 上の代表点とする.

【Step 8】 最後に, \mathcal{E}_7 の原点 O_7 を, 基準座標系 $\mathcal{E}_0 = (O, \mathcal{E})$ の原点に重ね, θ_1 だけ z 軸回転させ, これに基準座標の原点 $O = \mathbb{O}$ を付加した集合,

$$\begin{aligned} \mathcal{X}_0 &= \{R_8 T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_1^1, R_8 T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_2^1, R_8 T_7 R_6 T_5 R_4 T_3 R_2 \xi_3^1, \\ &R_8 T_7 R_6 T_5 \mathbb{O}, R_8 T_7 \mathbb{O}, \mathbb{O}\}, \quad R_8 := \text{Rot}(z, \theta_1) \end{aligned} \quad (7.10)$$

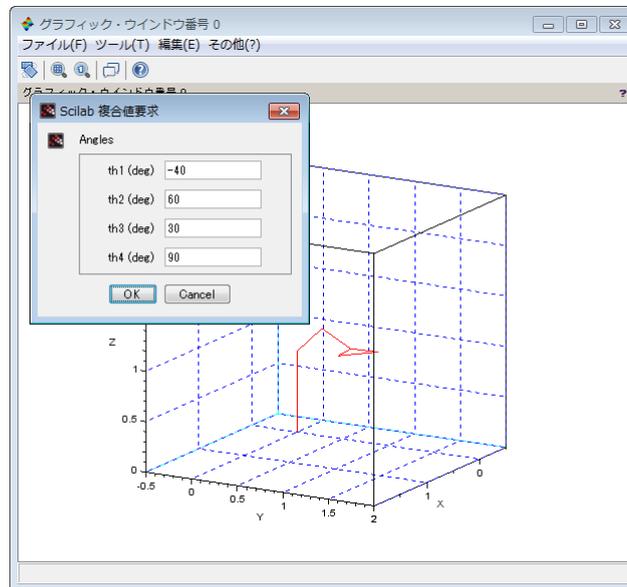
を作る. ($R_8 \mathbb{O} = \mathbb{O}$)

この \mathcal{X}_0 が，基準座標系 \mathcal{E}_0 における図 4 のマニピュレータの形状データとなる．改めて列挙すると，次のようになる．

$$\left\{ \begin{array}{ll} \xi_1^0 = R_8(\theta_1) T_7 R_6(\theta_2) T_5 R_4(\theta_3) T_3 R_2(\theta_4) \xi_1^1 & \text{手首} \\ \xi_2^0 = R_8(\theta_1) T_7 R_6(\theta_2) T_5 R_4(\theta_3) T_3 R_2(\theta_4) \xi_2^1 & \text{手先 1} \\ \xi_3^0 = R_8(\theta_1) T_7 R_6(\theta_2) T_5 R_4(\theta_3) T_3 R_2(\theta_4) \xi_3^1 & \text{手先 2} \\ \xi_4^0 = R_8(\theta_1) T_7 R_6(\theta_2) T_5 \circlearrowleft & \text{肘} \\ \xi_5^0 = R_8(\theta_1) T_7 \circlearrowleft & \text{肩} \\ \xi_6^0 = \circlearrowleft & \text{根本} \end{array} \right. \quad (7.11)$$

各回転変換 R_i は角度に依存するので， $R_i(\text{角度})$ の形式で書いた．他方，リンク長 l_i を定数と仮定すれば平行移動 T_i は定数行列となる．

実習 2.7 Code 3 p15 を実行せよ．実習 2.4 などと同様の操作でリンク機構が動作する．



参考文献

- [1] P.R. ホール著・吉川恒夫訳：「ロボット・マニピュレータ」(コロナ社，2002年)

A プログラム例

Code 1: "kine-af.sce" (Scilab)

```
1| clear; clf(); //変数クリア; 描画クリア;
2| ##### アフィン変換 #####
3| function x = affine_trans(x0, r, angle)
4|     R = [ cos(angle), -sin(angle); ...
5|           sin(angle),  cos(angle) ]; //回転行列
6|     x1 = R*x0; //回転
7|     x = x1 + r; //平行移動
8| endfunction
9| ##### データ点列の変換 #####
10| function points = trans_object(r, angle)
11|     // 初期のデータ点列(三角形) //
12|     points=[ 2,-4, 2; ... //x座標
13|              2,-1,-1 ]; //y座標
14|     n=size(points,'c'); //点の数
15|     // 座標変換 //
16|     for i=1:n
17|         oldp = points(:,i);
18|         newp = affine_trans(oldp, r, angle); //アフィン変換
19|         points(:,i) = newp;
20|     end
21| endfunction
22| ##### データ点列の描画 #####
23| function draw_object(points)
24|     drawlater; clf(); //描画延期; 描画クリア;
25|     points=[points, points(:,1)]; //描画用に図形を閉じる
26|     plot(points(1,:),points(2:,:),"r-"); //折れ線グラフ
27|     g=gca(); g.isoview="on"; //座標軸の取得; 縦横比1;
28|     g.data_bounds=[-10,-10;10,10]; //座標軸の範囲
29|     p=gce(); p.children.thickness=3; //描画線の太さ
30|     xlabel("x"); ylabel("y"); //軸ラベル
31|     xgrid(2); drawnow; //グリッドon; 描画更新;
32| endfunction
33| ##### 処理の実行 #####
34| rr=[0;0]; theta=0; //初期姿勢
35| points=trans_object(rr, theta*%pi/180);
36| draw_object(points);
37| while(1) //意図的な無限ループ
38|     disp([rr',theta]); disp(points); //コンソールへ数値を出力
39|     txt = ['rx','ry','theta (deg)'];
40|     sig0 = string([rr;theta]);
41|     sig = x_mdialog("Position and Angle", txt, sig0);
42|     if ( size(sig) == 0 ) //もし入力が空なら
43|         break; //while脱出
44|     end
45|     rr(1) = evstr(sig(1)); //x方向変位
46|     rr(2) = evstr(sig(2)); //y方向変位
47|     theta = evstr(sig(3)); //姿勢角
48|     points=trans_object(rr, theta*%pi/180);
49|     draw_object(points); //データ点列の描画
50| end
```

Code 2: "kine-H.sce" (Scilab)

```
1| clear; clf(); //変数クリア; 描画クリア;
2| ##### 同次変換 #####
3| function x = H(x0, r, angle)
4|     A = [ cos(angle), -sin(angle), r(1); ...
5|           sin(angle),  cos(angle), r(2); ...
6|           0,           0,           1 ]; //同次変換行列
7|     x1 = A*[x0;1]; //ダミー成分1を付けて同次変換
8|     x = x1(1:2); //ダミー成分の除去
9| endfunction
10| ##### データ点列の変換 #####
11| function points = trans_object(r, angle)
12|     // 初期のデータ点列(三角形) //
13|     points=[ 2,-4, 2; ... //x座標
14|              2,-1,-1 ]; //y座標
15|     n=size(points,'c'); //点の数
16|     // 座標変換 //
17|     for i=1:n
18|         oldp = points(:,i);
19|         newp = H(oldp, r, angle); //同次変換
20|         points(:,i) = newp;
21|     end
```

```

22| endfunction
23| ##### データ点列の描画 #####
24| function draw_object(points)
25|     drawlater; clf(); //描画延期; 描画クリア;
26|     points=[points, points(:,1)]; //描画用に図形を閉じる
27|     plot(points(1,:),points(2,:),"r-"); //折れ線グラフ
28|     g=gca(); g.isoview="on"; //座標軸の取得; 縦横比1;
29|     g.data_bounds=[-10,-10;10,10]; //座標軸の範囲
30|     p=gce(); p.children.thickness=3; //直前の描画の線の太さ
31|     xlabel("x"); ylabel("y"); //軸ラベル
32|     xgrid(2); drawnow; //グリッドon; 描画更新;
33| endfunction
34| ##### 処理の実行 #####
35| rr=[0;0]; theta=0; //初期姿勢
36| points=trans_object(rr, theta*%pi/180);
37| draw_object(points);
38| while(1) //意図的な無限ループ
39|     disp([rr',theta]); disp(points); //コンソールへ数値を出力
40|     txt = ['rx','ry','theta (deg)'];
41|     sig0 = string([rr;theta]);
42|     sig = x_mdialog("Position and Angle", txt, sig0);
43|     if ( size(sig) == 0 ) //もし入力が空なら
44|         break; //while脱出
45|     end
46|     rr(1) = evstr(sig(1)); //x方向変位
47|     rr(2) = evstr(sig(2)); //y方向変位
48|     theta = evstr(sig(3)); //姿勢角
49|     points=trans_object(rr, theta*%pi/180);
50|     draw_object(points); //データ点列の描画
51| end

```

Code 3: "kine-robo.sce" (Scilab)

```

1| clear; clf(); //変数クリア; 描画クリア;
2| ##### 同次変換(3次元) #####
3| function A = Rotz(q)
4|     A = [cos(q), -sin(q), 0, 0; ...
5|         sin(q),  cos(q), 0, 0; ...
6|         0,      0,  1, 0; ...
7|         0,      0,  0, 1];
8| endfunction
9| function A = Rotx(q)
10|    A = [1, 0, 0, 0; ...
11|        0, cos(q), -sin(q), 0; ...
12|        0, sin(q),  cos(q), 0; ...
13|        0, 0, 0, 1];
14| endfunction
15| function A = Trans(r1,r2,r3)
16|    A = [1, 0, 0, r1; ...
17|        0, 1, 0, r2; ...
18|        0, 0, 1, r3; ...
19|        0, 0, 0, 1];
20| endfunction
21| ##### データ点列 #####
22| global HandData;
23| ##### マニピュレータ形状データの生成 #####
24| function points = trans_object(th) // th=[th1,th2,th3,th4]
25|     // 手首~手先の形状データ列(4点) //
26|     l1 = 0.8; l2 = 0.8; l3 = 0.8;
27|     hand = [ 0, 0, 0, 0; ... //x成分
28|             0, -0.2, 0.2, 0; ... //y成分
29|             0, 0.2, 0.2, 0; ... //z成分
30|             1, 1, 1, 1 ]; //ダミー成分1
31|     // 同次変換行列 //
32|     R2 = Rotz( th(4) );
33|     T3 = Trans(0,0,l3);
34|     R4 = Rotx( -th(3) );
35|     T5 = Trans(0,0,l2);
36|     R6 = Rotx( -th(2) );
37|     T7 = Trans(0,0,l1);
38|     R8 = Rotz( th(1) );
39|     // 形状データの生成 //
40|     for i=1:4 //手首~手先(4点)
41|         oldp = hand(:,i);
42|         newp = R8*T7*R6*T5*R4*T3*R2*oldp;
43|         xi1s(:,i) = newp;
44|     end
45|     xi4 = R8*T7*R6*T5*[0;0;0;1]; //肘
46|     xi5 = R8*T7*[0;0;0;1]; //肩
47|     xi6 = [0;0;0;1]; //根本
48|     xx = [ xi1s, xi4, xi5, xi6 ]; //一筆書きの点列

```

```

49|     points = xx(1:3,:);           //ダミー成分(4行目)除去
50| endfunction
51| ##### データ点列の描画 #####
52| function draw_object(pts)
53|     drawlater; clf();           //描画延期; 描画クリア;
54|     param3d(pts(1,:),pts(2,:),pts(3,:)); //3次元折れ線グラフ
55|     g=gca(); g.isoview="on";     //座標軸の取得; 縦横比1;
56|     g.data_bounds=[-0.5,-0.5,0;2,2,2.5]; //座標軸の範囲
57|     g.rotation_angles=[75,30];   //3次元透視角度
58|     p=gce(); p.thickness=3;      //描画線の太さ
59|     p.foreground=5;             //描画線の色番号
60|     xlabel("X"); ylabel("Y"); zlabel("Z"); //軸ラベル
61|     xgrid(2); drawnow;          //グリッドon; 描画更新;
62| endfunction
63| ##### 処理の実行 #####
64| thdeg = [-40, 60, 30, 90];      //初期姿勢 deg
65| points=trans_object( thdeg*pi/180 );
66| draw_object(points);
67| while(1) //意図的な無限ループ
68|     disp(thdeg); disp(points); //コンソールへ数値を出力
69|     txt = ['th1 (deg)', 'th2 (deg)', 'th3 (deg)', 'th4 (deg)'];
70|     sig0 = string(thdeg);
71|     sig = x_mdialog("Angles", txt, sig0);
72|     if ( size(sig) == 0 ) //もし入力が空なら
73|         break; //while脱出
74|     end
75|     thdeg = evstr(sig)'; //姿勢角 deg
76|     points=trans_object( thdeg*pi/180 );
77|     draw_object(points); //データ点列の描画
78| end

```